

若者よ

齊藤讓

(25)

若者よ

今年の成人式は、大行天皇が崩御された直後であり、また、幕を開けた平成新時代の劈頭にあたることもあって、主催者である私達は、万感の思いにいささか緊張気味であった。新成人の若者達も、さぞかし肩に力が入ってはいまいかと案じたが、意外なほどに、そんなこだわりは感じられなかった。変化に対する無感動や、物事にこだわらず無感心を装う現代若者像の一端を垣間見る思いがした。しかし、この傾向は、多分にめまぐるしく変貌する社会状況や、厳しい競争社会の反映として生まれてきていることも否定できないことであり、一面では、あらゆる事象に冷静に対応する慎重さにつながる

ものであるのかも知れない。ただ、私のような世代、立場からすれば、時には、若者特有の粗削りではあるが、一途な情熱の迸りを期待するところもある。ともあれ、式場に集まった新成人は、まるで輝き匂うばかりに二十歳の春の香を振り撒いているようであった。それは、何物をもつても替えることのできない、若者だけが持つ目くるめくような若さの輝きであり、息吹である。私も他人から若い町長だといわれてきたが、いま四十五歳の馬齢を重ねるところとなり、彼等から見れば私は完全なオジンであって、彼等の若さには一種近寄り難く、圧倒されるような気持さえする。されど、時の流れは速い。「若者よ、君達だけが持つことのできる青春という

この短い貴重な時間を、決して無駄や疎かに費やしてはならない」と声を大にして叫ばずにはいられない。ところで、今年も各地区から一人ずつ代表が出て、二十歳の決意を發表した。ある人は、成人を契機に過去の甘えを捨て、社会人として責任のある行動をとっていきたいと語れば、二十歳は人生の通過地点にすぎないが、自覚をもって行動しないと、人生のコンパスが狂うので注意したいと思つていと語る者もいた。そんな中で、一人の青年の發表が、私の胸を打った。この青年は、五之神の椎名秀治君である。彼の發表の一部を紹介しよう。

「私は、高校を卒業するとすぐに、家業である孵化業を継ぎました。あい鴨の飼育をして採卵し、それを孵化してヒナにする仕事と、ヒナを食肉用に育てその肉を販売する仕事です。」

「当初は、鳥の世話をしただけだと安易に思つてしましたが、今では、良いヒナをつくることはプロであれば当然のことで、良い品物をつくれぬ者は、全く問題外であることがわかってきました。」

そこで彼は、遠く関西や四国の同業者を訪ねたり、研究発表会等に参加して努力した結果、技術面に於ては、自分自身でも満足できる成果が挙げられるようになったという。彼は、更にこう語る。

「しかし、販売交渉等の面では、満足できる状態ではありません。営業のため東京のデパートやホテルに行くのですが、交渉の相手はすべて年上の人であり、対話作法もあまり知らないもので、つい固くなってしまつて交渉の核心にも触れないで終わってしまうときもあり、また、交渉に代人を出して相手に迷惑をかけたりにして、まだまだ一人前とはいえない自分を知り、情けなく思ったことも何回かありました。」

一生懸命に販路を拡大しようとして苦勞している若い彼の姿が、鬚髯として浮かんで思はず涙がでた。そして、彼は

次のように結ぶのである。

「自分のすることに責任をもつていかなければ、実社会には全く通用しないということを、実際の仕事を通して強く感じました。義務をわきまえて、責任を遂行することは、成人として負うべき絶対の道徳であることは、身近な体験から強く学びとることができました。」

訥訥として語る彼の言葉には、必死になつて未来を切り開いていこうとする、一人の若者の直向な情熱が滲んでいた。彼に、今更語ることは何もない。しかし、「頑張れ！」の一言だけはいたい。

私は、人の真価が問われる時は、苦しい局面にたたされたときの決断と実行だと思つている。苦難に背を向け、逃避するのは愚者の選択である。また、いかに素晴らしき考えや構想も、決断と実行なくしては、ただの夢、幻にかすぎない。

正に「打たねば鳴らぬ」である。